

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：11601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12833

研究課題名（和文）組織存続と組織ルーチン：非営利組織を対象とした探索的研究

研究課題名（英文）The Relationship between Organizational Survival and Organizational Routine

研究代表者

野口 寛樹 (Noguchi, Hiroki)

福島大学・経済経営学類・准教授

研究者番号：70735951

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、組織ルーチンの生成・構築、また、構築された組織ルーチンが、組織存続にどのような影響を与えるのか、を非営利組織における高齢者という人的資源の利用、活用を対象に明らかにすることである。本研究の成果は以下となる。まず、ボランティアな活動を主に行う組織の資源蓄積、すなわち、どのような組織成員を質的にまた量的に参加させ組織存続を図るのかについて、ボランティア組織のクライアントに対するサービス提供を検討するに、4つのパターンがあることを示した。続いて、組織存続に影響を与える組織ルーチンを参照して生じる多様な仕事実践を組織化するためのデザイン原理を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：非営利組織研究は多元的であり計量書誌学的レビューによる分析でも、様々な分野からの研究が行われていた。ただその中でも、組織ルーチンという視角からの分析は少ない。本研究は、ボランティア性をもつ組織成員の要求とクライアントの要求の相互関係を基礎に、組織存続に影響を与える組織ルーチンを参照して生じる多様な仕事実践を組織化するためのデザイン原理を探索的に指摘した。

社会的意義：非営利組織における組織存続を考えるに、組織成員とクライアントの相互関係を特に考える必要があり、仕事実践を組織化するためのデザイン原理を考える中では、人工物にも注目をしたその活動の作り込みが重要になる点が指摘される。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify (i) the generation and construction of organizational routines and (ii) how the constructed organizational routines affect the survival of the organization, with a focus on the use of elder people in non-profit organizations. The findings of this study are as follows. First, it is shown that there are four patterns of resource accumulation in organizations that mainly carry out voluntary activities, that is, what kind of organizational members are involved qualitatively and quantitatively in order to ensure the survival of the organization, by considering the provision of services to the clients of the voluntary organization. Then, design principles for organizing the various work practices that arise with reference to the organizational routines that affect organizational survival are pointed out.

研究分野：組織論，非営利組織論

キーワード：非営利組織 高齢者 組織ルーチン 組織存続 資源蓄積

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

1998年の特定非営利活動促進法以降、営利を目的とせず、主な組織成員がボランティアで構成される組織の代表として認知されるNPO法人は、組織存続に対し重大な課題を抱えている。それは、社会問題解決のために組織参加をする者が多く、組織運営、加えて長期的な活動を考えた組織能力、ひいては、その基礎たる組織ルーチン構築を行い、組織を存続させる動機づけが弱いからである。

またボランティアの高齢化の議論も存在する。既存研究における高齢者の活動は「参加」が主要な議論であり、個々人の背景に合わせた、短期的な活動が想定される(野口, 2012; 2017)。そのため、組織には誰もしたくないが、組織にとって必要な仕事がなされない可能性がある。そのような仕事は、本質的には重要であるため、先伸ばせない時期が来ると、組織成員の誰かが処理を行う。しかし、その誰かがいなければ、組織は瓦解する可能性が高い。つまり短期的な視点を持つ成員ばかりいることは、組織存続に重要な影響を与える。

以上のように、特に高齢者が主要な成員となるNPO法人は、短期視点の活動圧力にさらされており、組織存続に懸念がある。しかし、活動を継続的に行うNPO法人も観察されるようになった。よって現存しているNPO法人を分析することで、組織ルーチンが組織存続にどのような影響を与えるのかを検討する意図を持っていた。

### 2. 研究の目的

本研究は、組織ルーチンの生成・構築とその組織存続に与える影響を、Feldman & Pentland(2003)の議論を踏襲、修正し、さらに組織活動に必須となる物的経営資源・人工物の役割も考慮に入れ(Pentland & Feldman, 2008; D'Adderio, 2011)、組織能力の基礎たる組織ルーチンのモデル化を行う。複雑化が進む組織ルーチンを構成するどのような変数が組織存続に影響を与えるのかを明らかにする。

具体的には、組織ルーチンがどのように生成・構築されるのか、また構築された組織ルーチンが、組織存続にどのような影響を与えるのか、を非営利組織における高齢者という人的資源の利用、活用を対象に明らかにする。

非営利組織、特にNPO法人における、高齢者という人的資源は、組織成員がボランティアという特徴を持ち、加えて、その性質上、短期的な活動を望むため、組織運営に対する動機づけが弱い。そのため、NPO法人は短期的な視点からの活動を余儀なくされ、長期的な組織能力の構築、そしてその基礎たる組織ルーチン構築の難しさのため、組織存続に重大な課題を抱える。本研究は長期的に活動をしているNPO法人を対象とした分析により、短期的視点ではない、長期的視点を取り込む組織ルーチンモデルが、様々なアクター間の相互作用により可視化されることで構築され、その構築された組織ルーチンが組織存続へ与える影響が検討される。

### 3. 研究の方法

本研究は、2種類の研究方法を用いて行われた。

まず、高齢者のみで運営される非営利組織を対象に、組織ルーチンと組織存続の関係を検討すること目的として研究を行った。具体的には、高齢者のみで継続的に活動をしている非営利組織を調査対象に、組織存続に影響を与える組織ルーチンを参照して生じる多様な仕事実践を組織化するためのデザイン原理を探索的に明らかとするためである(吉野, 2014)。

調査としては、ふくしま地域活動団体サポートセンターの協力の下、福島県下で組織成員の多くが高齢者であるNPO法人の有無に関わらない非営利組織の中で(31団体)、特に高齢者のみで運営がなされている2団体を対象に、組織存続に関する視点から半構造化インタビュー調査、活動の観察を行った。

続いて、文献調査から理論研究を行いつつ、先行研究からみた本研究の位置づけの検討、また分析等を定量的な視角から行っている。具体的には、計量書誌学的レビューを志向した文献調査を行った(Aria & Cuccurullo, 2017)。特に、非営利組織研究を専門に扱うジャーナル3誌、Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly、Voluntas、Nonprofit Management and Leadershipを対象とし、その3誌を中心とした先行研究の比較・検討を行うことで非営利組織研究に関わる言説空間の可視化を行った。また、非営利組織における資源蓄積についての検討に基づき、組織の活動(サービス提供内容)を考える中で、高齢者活用の現場から、(独)高齢・障害・求職者雇用支援機構の研究成果、また内閣府のエイジレス・ライフ実践事例の報告書についてテキストマイニングも行った。

### 4. 研究成果

結論としては、以下3点になる。

(1) 高齢者のみで運営される非営利組織を対象とした、組織ルーチンと組織存続との関係

高齢者のみで継続的に活動をしている非営利組織を調査対象に、組織存続に影響を与える組織ルーチンを参照して生じる多様な仕事実践を組織化するためのデザイン原理について、探索的な指摘をしている。

結論としては、組織ルーチンを参照して生じる多様な仕事実践を組織化するためのデザイン原理の指摘として、二つの手段と機能(デザイン原理)について指摘をした。組織存続を目的とする仕事実践には、第一に組織に責任を負わせる、ということと、第二に証拠を残すという手段が指摘される。そして以上二つの手段からは、ミッション確認機能と情報の集約・発信機能を確認することができた。そして、組織に責任を負わせるという手段はミッション確認機能に裏打ちされる仕事実践例であり、証拠を残すという手段はミッション確認機能と情報の集約・発信機能に裏打ちされた活動である、ということを示した。

(2) 非営利組織における組織存続のための資源蓄積の方向性について

組織存続に関わり、「探索」と「活用」の両立を可能とする組織ルーチンの構築(デザイン原理の追求)を考える中で、ボランティアな活動を主に行う組織の資源蓄積、すなわち、どのような組織成員を質的にまた量的に参加させていくのかについて、諸理論を検討しながら、ボランティア性をもつ組織成員の要求とクライアントの要求の相互関係について検討をした。それは、非営利組織のサービス提供に関わる標準化とカスタマイゼーションの視点から、お互いの要求を統合することにより、資源蓄積の基礎となる理論的枠組みを提示することとなった。

結論として、ボランティア組織のクライアントに対するサービス提供を検討するに、資源蓄積の基礎には、組織成員とクライアント関係において、1 標準化とカスタマイゼーション、2 互いに標準化されている、3 カスタマイゼーションと標準化、4 個別対応関係、の4つのパターンがあることを示し、ボランティア組織の資源蓄積、つまり組織存続について含意をもたらした。

(3) 非営利組織研究における、経営学的視点(組織ルーチン)の必要性について

先行研究からみた本研究の位置づけの検討、具体的には、計量書誌学的レビューを志向した文献調査を行い、組織存続に関わる非営利組織研究における経営学視点の意義について検討をした。この分野を専門に扱うジャーナル3誌、Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly、Voluntas、Nonprofit Management and Leadershipを対象とし、その3誌を中心とした先行研究の比較・検討を行うことで非営利組織研究に関わる言説空間の可視化を行った。その結果、非営利組織研究における経営学的見地からの言説は、組織理論と組織間関係のグループ(主に制度論と資源依存論)からの分析が主流であることがわかった。今後の組織存続に関わり、組織ルーチンという分析視角の重要性を指摘することができた。

< 本研究に関わる主要な引用文献 >

- Aria, M. & Cuccurullo, C. (2017) "Bibliometrix: An R-tool for Comprehensive Science Mapping Analysis," *Journal of Informetrics*, 11(4): 959-975, Elsevier, DOI: 10.1016/j.joi.2017.08.007
- D'Adderio, L. (2011) "Artifacts at the Centre of Routines: Performing the Material Turn in Routines Theory." *Journal of Institutional Economics*, 7(2): 197-230.
- Feldman, M. S. and B. T. Pentland. (2003) Reconceptualizing Organizational Routines as a Source of Flexibility and Change." *Administrative Science Quarterly*, 48, 94-118.
- 野口寛樹(2017)「高齢者のみで組織を運営する: 組織論からの分析視角」『商学論集』86(2): 39-53.
- 吉野直人(2014)「組織ルーチン研究のアイデンティティ: 仕事実践を組織化するデザイン原理の探求」『日本情報経営学会誌』34(2): 84-96.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 野口 寛樹	4. 巻 87巻、4号
2. 論文標題 組織存続に影響を与える組織ルーチン：高齢者のみで運営される非営利組織を対象とした探索的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 商学論集	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野口寛樹	4. 巻 88巻、3号
2. 論文標題 ボランティア組織における資源蓄積の方向性：クライアントと組織成員の要求を統合する理論枠組みの構築	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 商学論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野口 寛樹，中本 龍市	4. 巻 88巻、4号
2. 論文標題 経営学領域における依存・パワー関係の広がりと精緻化 Emerson(1962)とPfeffer and Salancik(1978)，そして、その後の実証研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 商学論集	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野口 寛樹，中本 龍市	4. 巻 90巻、2-4号
2. 論文標題 非営利組織研究に関わる言説空間の可視化：計量書誌学的手法からの検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 商学論集	6. 最初と最後の頁 29-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野口寛樹
2. 発表標題 組織存続と組織ルーチン：高齢者のみで運営される非営利組織を対象とした探索的研究
3. 学会等名 日本経営学会第92回
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------